



障害をもつ幼児の保育(6)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

手を使うこと その一

F 前回まで足を使って歩くという話を話し合ってきたのですが、更に手を使うことに思いついたとき、足と手の違いはどこかと考えました。足を使って歩くことは、それによって自分の世界が広がる、そして手を使うことは自分の世界が深まることじゃ

ないかと思ったのです。それは今年の夏、孫の赤ん坊がうちに来ていて、一月半以上いました。その間に赤ん坊の世界がだんだん明瞭になるにしがって手を使うってことがはつきりしてきました。そのプロセスを見ながら私の感じたことなんです。そし

て以前に出会った障碍をもつ子どもたちの手を使うことと成長とに思いが広がりました。

手の機能は周囲の世界に対する感動から開かれる

M 見たものを手でつかむというのは赤ん坊の発達の上で非常に顕著なことです。それをよく見ていると手をつかむ前に赤ん坊は何かをじっと見つめているということがあります。手を使う前に赤ちゃんは何かに関心と興味を持つ。それは赤ん坊なりに心の中に何かイメージを持っているんじゃないかと僕は思うんです。それが何か光るものだったり、あるいは動き回るものだったり、それぞれの場合によつて違うでしょうけれども、関心を持った物に触れようという気持ちが出てきます。以前、僕は目に見えた行動上の発達しか気にとまらなかつたけれど、また新しく朝も晩も赤ん坊と一緒に生活してみると、さまざまの関心、興味が赤ん坊の中にあつて

初めて手を触れることが出てくるんだなあとということが分かりました。

F ええ。小さな赤ん坊が八ヶ月になったときに、ジーツとなにかを動かさずに見ているので、これはどうしたのかしらと思つて心配になつて後ろから顔をのぞき込んでみたら、その子は窓から差し込む木漏れ日がちらちらと揺れるのを陶然と見ていたのね。

私のがぞき込むと、赤ん坊のほうがはにかんだような「このちらちらするものはなんなの？」つていうように、私のほうに承認を求めるような顔をしてね、振り返つたんですよ。それで私は、この子に共感するように、「きれいねー」つて言いました。「あれが光というもの」「ほんとにきれいねえ。そうやって見ていてよかつたねえ」つていうような思いを込めてそう言つたら、赤ん坊がニコツと私のほうを向いてほつとしたような顔して笑いました。それで、これは新しくこの子の目に映つた、何か心にイ

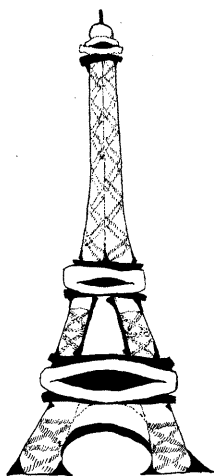
メーじしたもの、それをつかむことはできないもの
なんだけれども、確かに心を動かされていました。
その時はお座りをして見ていたんです。

M あなたはその話を聞いたときにね、僕はすぐに
乳児の古典的な発達研究のティデマンの育児観察記
録を思い出しました。それは嵐の後の黒い雲の隙間
から一筋の光がずっと差してきたときに、その赤ん
坊は感激してそれを眺めた。見るごとと感動とが、
伴っていることがその古典的な観察研究の中にあっ
た。これについては僕が『子どもの世界をどうみる
か』の中に書きました。

F 孫が生後十ヶ月になって、昨日うちへきたとき
に、その赤ん坊が台所の壁にちらちらと光る木漏れ
日を見て、片手でつかまり立ちして、もう一方の手
で木漏れ日を探っているのを見ました。自信をもっ
て得意そうにやっていました。もう以前の呆然とし
たような感激より一歩進んで、何かにつかまって光

を捕らえようとしている。同じ木漏れ日を見ても
一、二ヶ月経てばもうこんなに変わるんだって思い
ました。

M そうなつたときの赤ん坊は今度は見たものを何
でもつかんで引きずり出す、引つ張る。そういうこ
とが次々にもう数え切れないくらいあるもんだか
ら、親は目を離せないで追っかけて回っているよう
な状態ですよ。そして食べるものにも手を出すも
のだからそれまでは離乳食だといって大事にして
食べさせてもらっていたのが、もうそれじゃ待ちき
れなくなつてそのスプーンに手を出し、食べ物自体
に手を出して、それで親が音を上げるといような



ことになるんですね。

手を使うことは自我の発生につながる

M 愛育で保育していると自分でものを食べると言うようなことは、まだ到底できないような子どもが何人もいます。その子どもたちのことを思い浮かべると、いつもバギーに乗っていたり車椅子に乗っていたり。その子どもたちを見てみると、車椅子に乗りながらもある子どもは手すりを触ったり、握ったりしている。それを見て僕はこれを大事にしながらはとと思いました。たまたま食事のときにご飯に子どもが手を触れたときに、僕はそれは「握る」チャンスだと思ってやらせてあげようとした。ところが、大抵のお母さんはそれはやらせてあげない。お母さんと話をしながらそのことがどんなに大事なことをか話し合いながら、長い時間かかって子どもが手を使い始めたとき、一歩先にいったように思いま

した。お母さんの気持ち、考え方とのやり取りの中ですることだから、こちらが主張して無理に進めることはできません。

F 手を使わないで人にやってもらうことはどう考えたらいいのでしょうか？

M その子どもの世界には自分に属するもののはつきりしない状態じゃないかと思う。霧の中のようにあつて、あるものが自分に属するものか、他に属するものかというその境目がはつきりしないのでしよう。それが手で掴むことによって、自分のものになる。これは一般論になってしまうかもしれないけれども、自分の手を使うことによって自分の世界に属するものができてくる。

F それは大事なことです。そしてまた手放すということが次の段階として出てくるのですから。

M それで先ほどの、いまうちにいる赤ん坊を見てみると、いろいろなものに関心が出てきて捕まえ

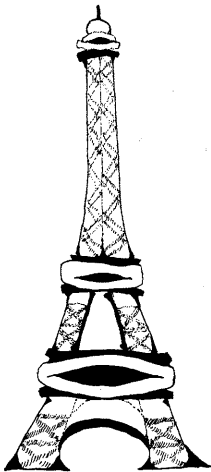
て、捕まえるとそれを引っ張る。引っ張るとい
は自分のほうに引っ張る。非常に原初的な自分とい
うものの発生と言えるんじゃないだろうか。

F ああ、なるほどね。おぼろげな世界にまだ生き
ていて車椅子やバギーに乗って登園してきた子ども
たちについて言うならば、まだそこまで開けていな
くて、霧の中のようって言われたけれども、霧の中
にいてまだ自分というものを意識していない。快不
快の感覚でしか意識していないときにみんなの中に
登園してくるわけですね。バギーに乗っていたI夫
くんは、卒業が近付いたある日、私とそのバギーを
押していたら、他の子が羨ましくなってその子の上
からもう一人座ってしまいました。そして二人に
なあって、初めはそれでもあまり感情を表現しなかつ
たのに、そのうちに前の子が邪魔になつたらしくI
夫くんが自分の手でその子を押し出して、追い払っ
てしまったっていうのを見ていて、ああ、子ども同

士で遊ぶ中ではこういうことも出てくるのかと感動
しました。

M 前に、手に持ったものを自分のほうに引き寄せ
ることが、自我の発生の根本だと言ったけれども、
手に持ったものを自分のほうに引き寄せるのではな
くて逆の方向に押し出すこともまた自我でしょう。

F そうでしょうね。自分で選択が出来るんだか
ら。この物は自分のほうへ引き寄せるが、何でもか
んでも引き寄せたいわけじゃなくて、やがて選択し
てこれは自分の世界に入ってきちゃ困るとか、これ
は自分の世界には取り入れたいとかっていうことが
いろいろ出てくるのでしょ。これこそが自我の発



生につながるのですね。

全身の機能を開く手―つかまり立ちに見る

M 愛育を卒業して若者となったI夫くんは、青年達のグループに来ていて、いま好調なんですよ。

先日窓枠につかまってじっとこちらを見ているI夫くんを見て、あれはだれかしらと、遠くからではI夫くんと分からなかったくらい、本当に驚きました。

F ああ、そう。立って歩けるようになったの？

M 自分で歩くってわけじゃないけれども立ってつかまって歩くことはもうかなり自由自在ね。そんなこと以前には考えられもしなかった。

F だからつかまるっていうことが本当にだいじなのね。

M そうだね。つかまることが基本だからね。

F 最近、お母さんと電話で話したとき、Iくんは

腰高の窓につかまって自分で膝立ちをして外を眺めるのを楽しんでいるそうです。青年部では調理実習で、包丁を持って御馳走を作ったり、お皿を洗ったりもするそうです。手でつかまることから世界がずっと広がって、生活の質が豊かになったのですね。

M いま、うちの赤ん坊は手で食卓のへりにつかまって移動することを苦心しながらやっている。足が交差してしまったり、両足で踏ん張って立てなくても手の力が助けとなっている。赤ん坊も自分らしく生きることを頑張っているのだと思いました。

F I夫くんは物や道具につかまるよりも、人にかまるとほうが好きで安心するそうです。それでお母さんが腕を横にして出すと、それにつかまって立つようになったと話してくれました。本当に人に対する信頼感を育てることがたいせつなのが分かりますね。

M 手の機能だけから言うと、愛育の子どもの何人かは行動は単純に見えても、内面の複雑さや繊細さは、赤ん坊とは比べものにならないものがあります。

F I夫くんは手のひらが非常に敏感で、こんなに手を使うようになってもしっかりお母さんに食べさせてもらっているそうです。これはいろんな子に見られることですが、どう考えたらいいのでしょうか。

M 僕はなんとかしてI夫くんにいろいろな触覚を経験させたいと思い、以前に砂場につれて行って座らせることを試みたことがありました。手を使わない子どもは逆に言うところベトベトした触覚に対して非常に敏感な子どもだということを頭に置く必要があるということが分かって来ました。どこまでもその子の感覚を尊重し、それを表現できるようにすることがたいせつです。その表現の仕方が大人の考えや趣味に合わなくても、その子のやり方をゆるし、そ

の子が上向きに生きて行けるようにするのが保育です。

F そのデリケートさと自尊心を認めて、自分からやり始める日を待つのですね。

今回は身近な赤ん坊や愛育で出会った子どもたちの、手の使い方と成長の姿を通して手を使うことの意味について考えました。

